

ウメ「南高」の生育特性

農業研究センター 果樹研究所 落葉果樹部

担当者：益田 信篤

研究のねらい

近年ウメは健康志向、機能性、安全性更に、柑橘園転換作物として関心が高まり、産地化の動きがみられる。このため、本県におけるウメの主要品種「南高」の安定生産を図るため、生育特性を検討した。

研究の成果

- 1 本県に導入されている主要品種の中で、南高の樹勢は中庸で、開花始期は2月2半旬と早い方に属し、開花期間は長い。開花率は86%、着果率は38%と導入品質の中では最も高い。
- 2 果実肥大は、後期肥大が旺盛で成熟前10日間で果重の60%が増加する。成熟期は6月3~4半旬で最も遅いほうである。1果重は25gと比較的大きく、果形はよく揃い、完熟しても果形がみだれることは無い。
- 3 樹冠1m²当たりの収量は1.7kgと王英より多く、鶯宿、梅郷と同程度で、年次差は少なく、豊産性である。

普及上の留意点

- 1 南高は梅干しに最適といわれている。しかし、自家結実性が低いので、受粉樹(梅郷、鶯宿、甲州最小等)の混植が必要である。また、結実率が高いので、着果過多のため、小果や樹勢の衰弱が懸念されるので剪定をやや強くすると共に、摘果による適正着果に努める。
- 2 枝幹害虫「コスカシバ」の被害が多いので、防除を徹底する。

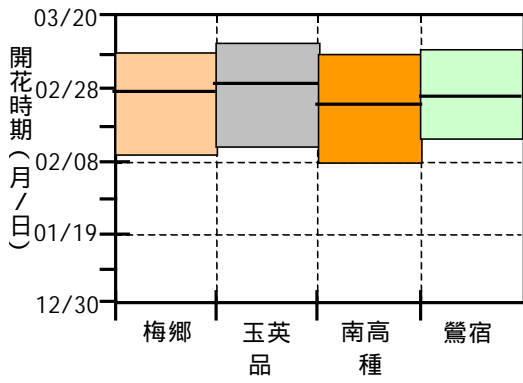


図1 主要品種の開花期間

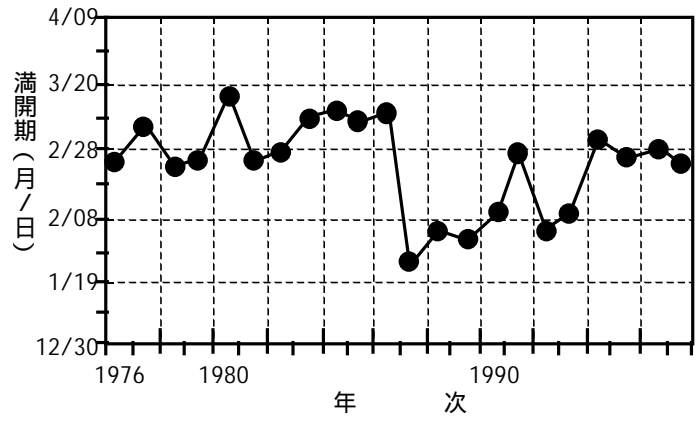


図2 南高の年次別満開期

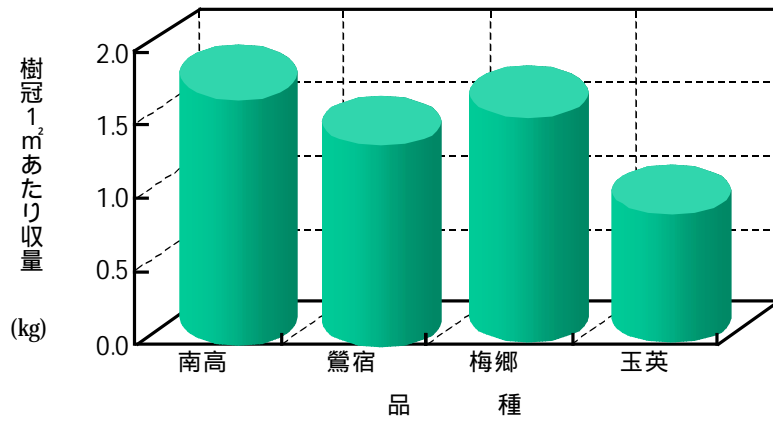


図3 樹冠1㎡あたり収量

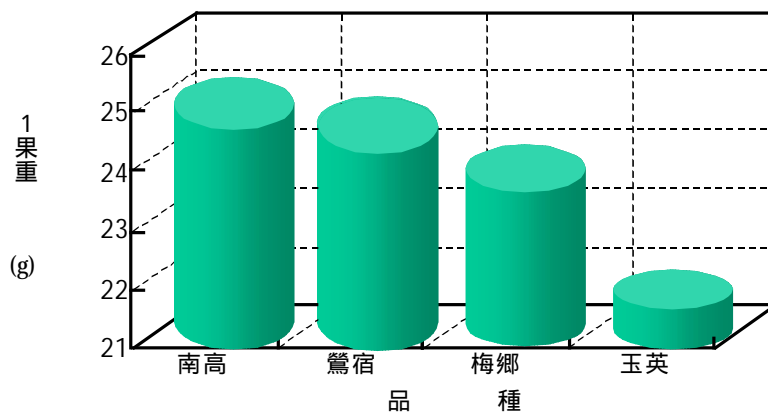


図4 1果重